

中国における動員型ボランティア活動の実態

—大学生に対するボランティア意識調査を中心に—

LI Danni

中国では、ボランティア活動を指す言葉として、「志願服務」「志願者活動」がある。「志願服務」「志願者活動」は、大きくは、「青年志願者活動(ボランティア支援組織や学校を基盤としたボランティア活動)」と「社区志願者活動(地域コミュニティを基盤としたボランティア活動)」の2種類に分けられる。

1994年に設立された「中国青年志願者協会」(CYVA)という組織は、中国全土において青年志願者活動を支援するボランティアセンターとして機能している。その志願者活動の活発性と中国社会での認知度の高さにおいて、ボランティア支援組織の中では群を抜いている。しかしながら、政府が主導して立ち上げた組織であるために、その「官製ボランティア」としての限界性から、強制性や形式主義などに対して問題指摘されることも多い。実際、組織内の志願者からは、活動が強制的であることやボランティア活動内容において前提となる専門技能が欠如していることなどに対して、批判の声がしばしばあがっている。CYVA に対する評価にはこうした厳しい批判があるものの、中国社会において、ボランティア推進機関として、中心的な役割を果たしていることには疑問の余地はない。中国では、そもそも、中国政府が認めるボランティア団体でなければ、一切開設もできないし、運営もできないという大原則が存在する。したがって、欧米社会や日本社会と同様に、自由を基盤とする市民社会という議論の文脈で、参加型ボランティアを論じることは中国では難しい。筆者は、こうした現在の中国における社会的基礎構造は大きく変わらないという前提のもとで、いかに中国社会において、青年層のボランティア活動を活性化させることができるかという論点を巡って、筆者自身が企画・実施した大学生に向けたボランティア意識調査を基盤として考察を進めていく。

本論文の狙いは、中国における「動員型ボランティア活動」の実態を明らかにすることである。青年層の中でも、大学生ボランティア活動経験者の活動実態や意識に焦点を当てていく。具体的に

は、中国の3つの大学(重慶医科大学、重慶師範大学、重慶医薬高等専科学校)において、大学生に向けたボランティア意識に関するアンケート調査を実施し、477件のデータを回収することができた(有効回収率 87%)。それと並行して、ボランティア登録証を持っている大学生志願者 42 名に向けたインタビュー調査を実施した。こうした量的・質的両データの分析に基づいて、現代中国における「動員型ボランティア活動」の実態を明らかにする。また、こうして得られたデータについては、小澤亘教授がすでに実施されているカナダ・韓国・日本での大学生ボランティア意識調査のデータと比較分析することによって、中国大学生のボランティア活動の文化的特徴を解析するとともに、中国的な動員型ボランティア活動について、国際比較研究の観点からも考察を加えている。

第1章では、中国のボランティア活動と言われる「志願服務」「志願者活動」に関する概念の整理を試みた。中国社会において、「ボランティア」がいかに位置づけられてきたかを歴史的に振り返ることによって、中国の現代的意味でのボランティア活動は、「雷鋒精神」というスローガンのもとに、共産党・政府指導者の宣伝活動によって推進された官製・半官製のボランティア活動が基盤となっていることを明らかにした。こうした基本性格を持つ中国の「動員型ボランティア活動」を、いかに評価すべきかという問題提起を行っている。

第2章では、ボランティアに関わる既存研究文献から動員型ボランティア活動と自発性に関わる論議を振り返り、政府あるいは准政府機関によって動員されている中国の組織的ボランティア活動について、その活動の実質を評価・吟味すべき必要性を論じている。また、中国における既存ボランティア調査の現況と問題点を明らかにし、中国においてボランティア意識調査を実施する際の基本フレームや調査方法について吟味した。

第3章では、中国の3大学において筆者が実施した大学生ボランティア意識アンケートのデータ分析を行っている。それを通して、現代の中国大学生のボランティア意識とボランティア活動実態を明らかにしている。また、こうした量的アンケート調査と併行して、ボランティア活動経験者の中から組織的なボランティア活動(=正式的な志願服務)の参加者に絞ってインタビュー調査を行った。こうした質的調査データ分析を通じて、組織的なボランティア活動実態を巡り、より詳しく活動内容の把握に努めている。さらに、小澤教授から提供を受けたカナダ・韓国・日本での大学生ボランティア意識調査データと比較分析することによって、中国における動員型ボランティア活動の現状と大学生ボランティアの特徴を解明している。

第4章では、議論したことをまとめている。中国大学生の 70%がボランティア体験を持ち、この比率は日本より高いレベルとなっているが、活動頻度は、年間2~7回体験者層が多く、全体として低めに留まっている。ボランティア活動を通じた「学び」の実感では、「社会的教養」や「企画

力」では低く、また、社区でのボランティア活動も少ないことが明らかとなった。しかしながら、中国大学生の学びの実感と自己肯定感は高く、ボランティア関心度も高い。動員型ボランティア活動に対する問題意識はあるが、それがボランティア関心にネガティブな影響を与えるには至っていない。これらの諸点に、中国における青年ボランティアの可能性を見ることができる。今後、中国の動員型ボランティア活動においては、いかに青年層側の自発性を重視していくかが課題となる。